

人文地理学のフィールドワークにおけるデータ収集法の検討

ー フィールドワークをめぐる関係構造に着目して ー

呉羽正昭

キーワード：フィールドワーク，人文地理学，データ，形式知，暗黙知

I はじめに

人文地理学分野の研究にとってフィールドワークは不可欠である。本稿は、景観の観察、土地利用調査および聞き取り調査といったフィールドワークによるデータの収集方法について検討する。

一般に、分析のために必要なデータは研究目的に基づいて設定されるものであり、一方で、そのデータはどのようにすれば取得できるのかという技術も多様である。そうしたデータの取得方法はさまざまであるが、フィールドワークもそのひとつの方法である。また、フィールドで実際にどのようにデータを取得するのか、どのような視点で調査をすればよいのかといった問いは、その研究の立ち位置や研究方法と密接に結びついている。もちろん、最初はおおまかなテーマと調査地のみが決められており、フィールドにおいてさまざまな調査を続けていく中で、分析に必要なデータを蓄積していくという研究スタイルも多いと思われる。

しかし、どのようにすれば短時間で効率的にデータを収集できるか、何に注目すればその事象に関して有効なデータを得られるのかといった疑問は、ブラックボックスの中に置かれてきた。つまり、地理学者は調査を重ねる中で、そうした方法を自然と身につけてきたのである。それゆえに、

フィールドワークの方法は、調査実施者によって異なっている。これについては、たとえば、異なる研究者が同じ場所・テーマでフィールドワークを実施するといった実験を実行できれば、ある程度は解決できるのかもしれない。しかし、この実験は現実には不可能であるため、本研究では筆者と大学院生それぞれのフィールドワークの実践に基づいて、それらの特徴を比較しつつ分析する。その際、フィールドワークが実施される対象地域をめぐる関係構造を導出し、その関係構造が経験によって異なることを示す。さらには、ブラックボックスと見られてきたフィールドワークの技術についても、形式知と暗黙知という概念を援用して整理する。

人文地理学に関する研究の分析スケールはさまざまであるが、ここではミクロな地域におけるフィールドワークに基づいた分析に限定する。ミクロな地域に関するフィールドワークでは、景観の観察、土地利用調査、聞き取り調査といった調査方法がとられる。ここでいうミクロな地域とは、日本では、農業集落や商店街などが該当し、おおまかには100戸程度以下の規模であろうが、本研究では小規模な自治体についてもミクロな地域と位置づける。研究テーマや分析方法によっては、こうしたミクロな地域よりも大規模な地域を扱うこともあろうが、ここではミクロな地域に関するフィールドワークについて扱う。もちろん、研究

対象とする地域のスケールに応じて、さらには研究対象に応じて、フィールドワークの方法や内容は異なってくる。ただし、この点に関する検討は、別の機会にゆずりたい。

II 筆者によるフィールドワークの実践

ミクロな地域に関するフィールドワークといっても、その地域に関する経験によって、その内容や方法は異なる。この事実は、その地域に関する経験が積み重なるにつれて、知識が増えるとともに、フィールドワークの内容はより専門的な事象に深まることを示している。したがって、ここではフィールドワークの実践をより単純に理解するために、初めて滞在する地域でなされるものと、複数回滞在したことのある地域でなされるものに分けて考える。

II-1 ルーマニアでの調査例

筆者は2008年から2010年にかけて、ルーマニアの山村ルカルRucărに3度滞在した。同期間、岐阜大学の小林浩二を研究代表者とする科学研究費「ルーマニア・ブルガリアの農村における持続的発展の危機とその再生の可能性」の共同調査のためである。一般に、ルーマニアの農村は、東欧革命以後の人口流出や経済基盤の崩壊などによって、多くの問題をかかえつつある。その特効薬として、ルーラル・ツーリズムが注目されつつあり、農業的色彩を残しつつも、農家民宿が多く存在するルカルを対象地域として選択した。これらの調査結果の一部は呉羽・伊藤（2010）や呉羽（2012）にまとめられている。

ルカル（写真）はカルパチア山脈の南山麓に位置する基礎自治体（人口約6,200）である。2008年7月に初めて滞在した際には、ルカルとその周囲の地域でジェネラルサーベイを実施した。ルカルでは、役場での聞き取り調査を実施し、概要を捉えることとした。またそこでは、聞き取り調査に応じてくれる人びとの紹介をお願いした。その結果、役場を始めとする調査先で、ルカルの農林

業、観光業、生活文化に関する情報を得た。さらに、伝統的な放牧形態が維持されている羊放牧小屋等での聞き取り調査をすることができ、EU加盟前後の経営変化等に関して理解が深まった。一方で、地図については、大縮尺の地形図のみならず、小縮尺の地図もほとんどない状況も明らかになった。加えて、人口や産業に関する統計や、民宿のリストも存在しなかった。ちなみに、共同研究者の1名はルーマニア語を母語とし、その他にルーマニア科学アカデミー地理学研究所の助手が通訳（ルーマニア語と英語）を務めた。

2回目の調査前には、農家民宿に関してルーマニアにおけるルカルの位置づけを明確にする準備作業を行った。2009年7月に再びルカルを訪れ、農家民宿での聞き取り調査を中心としてフィールドワークを実施した。調査期間中に投宿した施設の紹介、徒歩による景観観察によって宿泊施設の位置を確認し、聞き取り調査を実施した。調査項目としては、当初は開業年や動機、規模、宿泊客の客層・行動などであった。その後、数軒の調査を経て、提供するサービス、とくに食事サービスが宿泊客の主要な訪問目的のひとつであることが判明したため、その後はこれに関して、食材の調達先、提供方法などについても詳細に訊ねた。地図については、グーグルアースを利用した。帰国後は、調査結果をまとめ、2度の学会発表を実施した。

2010年7月に3回目の調査を実施したが、宿泊施設における聞き取り調査が継続された。ルカル中心部の北部には南北方向の2本の河谷があるが、その上流部の河谷沿いに点在する施設での調査が中心となった。同時に、カルパチア主稜線の北側に位置するモエチュMoeciuおよびマグラMăguraの観察を行った。モエチュでは、河谷底の平坦地や山麓に大小さまざまな規模の宿泊施設が林立するように立地し、自治体全体で1000軒ほどの宿泊施設が存在する。一方のマグラは高原状の地形を呈し、家屋は点在しており、いくつかの家屋は宿泊施設となっていた。このほか、ブカレストとブラショフBraşovの間に位置する高原

リゾート（シナイアSinaia やポイアナブラショフ Poiana Braşov）での観察も併せると、ルカルの位置づけが徐々に判明してきた。つまり、リゾートでは農業的な色彩がほとんどないことに対して、モエチュ、ルカル、マグラは基本的には農村である。しかし、モエチュではリゾートに類似した景観を呈するようになったのに対して、ルカルやマグラでは農業的な色彩が色濃く残っている。

上記に示したルカルでのフィールドワークの実践は、筆者にとってはルーマニアにおける初のフィールドワーク経験であった。しかし、このフィールドワークには、次の経験が大いに活かされていた。その1つは、1999年に、既にルーマニアに滞在したことがある点である。ブカレストをはじめとする都市や農村地域に10日間ほど滞在し、体制転換からまもない当時のルーマニアの景観や生活ぶりを観察したことによって、ルーマニアに対するイメージがある程度確立していた。さらに、同様の性格を有する東ヨーロッパ諸国（チェコやハンガリー）での研究・調査の経験があること、また同地域で観光地域や観光流動に関する分析経験があることによって、ルカルが有する特異性やルーマニア国内での共通性などをある程度把握することができたと考えられる。

II-2 オーストリアでの調査例

ゼルデンSölden は、チロル州西部にあるエッツタールの最奥部の自治体であり、また著名なスキーリゾートである中心地区の名称でもある。筆者は、1991年から1993年にかけてここに複数回滞在して調査を実施し、その結果の一部はKureha (1995) にまとめられている。その後、1999年に短時間滞在し、2011年8月以降は数度滞在した。1990年代初頭から現在までの約20年間で最も大きな変化は、リゾートの発展・拡大である。その一側面は、スキー場の拡大・施設更新や宿泊施設の高級化にみられ、こうした事実については、インターネットである程度の内容は把握していた。その際、チロル州やオーストリア統計局で公開されている種々の統計や関連する出版物、ゼルデン

の観光協会の情報、個々の宿泊施設のホームページなどが有用であった。さらに、2000年代には地球温暖化とスキー観光との関連について、世界的に多くの研究成果が刊行されたが、これらの文献に含まれた情報も参照することができた。

2011年8月に実際に現地を訪れ、徒歩でゼルデンの中心部や山麓沿いの地区を観察した。その結果、宿泊施設の分布域の面的拡大や建物の大規模化、アパートと呼ばれる施設の増加、建築様式の変化を実感することができた。加えて、主要道路沿いの商業施設が20年間で大きく変化したことが明らかになった。とくに目立ったのはスポーツ店の増加である。また飲食店の業種変化もみられた。そうした変化を分析するために、主要道路沿いの土地利用調査を実施した。また、観光協会長とコンタクトを取り、聞き取り調査を実施した。調査は進行中であるが、スキー観光客の客層や行動、周囲の市町村を巻き込んだリゾートとしての整備などの実態、さらにはスポーツ店の有する機能などについて解明が進みつつある。

上で示したゼルデンでの本格的なフィールドワークの実践は、筆者にとっては2度目であった。このフィールドワークには、筆者が別の調査や国際会議等でしばしばオーストリア、もしくはアルプス地域に滞在している経験が活かされている。つまり、アルプス地域におけるさまざまな農村空間やスキーリゾートを観察した経験が、それぞれの景観、絶対位置、相対位置の整理に役立っているのである。さらに、それらの地域的な差異、発展段階の差異などの考慮に基づいて、アルプス地域におけるゼルデンの特徴をつかむことが可能になっている。

III 大学院生によるフィールドワークの実践

ここまでは、筆者によるフィールドワークの実践について説明してきた。以下では、大学院生によるフィールドワークの実践について、調査実習での経験や指導した大学院生の振るまいの観察に基づく結果である。

大学院生X氏（修士課程相当所属）等は、A市B地区（農家50戸弱）で1週間にわたりフィールドワークを実施した。この地区は、果樹の栽培を中心とする農業集落であり、大学院生は共同で農業経営の実態やその変遷について調査した。彼らは、1週間、実質的には5日間で、25戸程度の農家からそれぞれの農業経営内容について、聞き取り調査を実施することができた。しかし、多くの農家事例は集まったものの、地区全体の農業経営の変化については情報が不足した。これは、聞き取り調査を実施できた個々の農家での情報収集が不十分であったこと、さらには適切な調査相手が不在であったことによる。兼業農家が卓越する集落では、平日の昼間の聞き取り調査遂行が困難であったことも影響した。もちろん、過去の事象に関しては調査相手の記憶の程度によって、情報取得の出来不出来が左右される。しかし、より本質的には彼らの知識不足が作用したと思われる。つまり、大学院生自体が果樹農業やその変化に関してより多くの一般的な知識を有していれば、調査を実施できた相手からも多くの有用な情報を得ることができた可能性は高い。

さらに、彼らは自分たちのイメージしたB地区の景観について写真を大量に撮影した。しかし、報告書で使用することをイメージして写真を撮ることができず、報告書に掲載すべき一部の写真が不足する状況になった。

次に、大学院生Y氏（修士課程相当所属）の例を述べる。彼らは、C市で観光農園の変遷と経営内容に関して、同じく1週間にわたりフィールドワークを実施した。具体的には、10戸程度の観光農園経営者・廃業者から経営内容等について、聞き取り調査を行った。C市において観光農園は、交通条件の変化とともに衰退傾向を示しており、そうした傾向下の観光農園経営の実態について解明することができた。しかし、それぞれの観光農園で聞き取り調査項目が異なったという問題点がみられた。これは、調査を進めていく中で、新たな調査項目が徐々に出現していくという、一般的な傾向と類似する事実である。ただし、その際、

Y氏等が観光農園や果樹農業、さらにそれらの変化に関する一般的な知識について、既存の研究成果から習得しておけば、ある程度は防ぐことができた問題であろう。

さらに、調査結果をまとめる際に、農業をはじめとするC市全体の変化と観光農園の変化とを関連づけること、さらにはC市の農業のなかに観光農園を位置づけることができなかった。C市の観光農園は、市内のほかの要素と密接な関係を有していることは疑いないであろう。これについては、調査実習中に毎晩実施される演習の場で、他の調査班の結果等に関心を持つことで解決できたと考えられる。こうした視野の狭さによって、結果的に多様な要素から構成される地域のすがたを表面的に理解する状態から前進できなかつたと捉えることができる。もちろん、教員としてはそのあたりの指導が重要な課題となる。

上記の具体例は、あくまでも教育プログラムの中での調査実習における事例と捉えられる。とくに、そこでは調査期間が1週間という期間に限られることが大きく影響している。つまり、その期間内で調査を完了させようとする、聞き取り調査の相手が不足するといった事態や、悪天候によって調査がはかどらないといった状況があるからである。一方で、修士レベルの大学院生では知識不足といった点も指摘される。しかし、大学院生も調査経験を重ねていくと、この問題点はクリアされるであろう。もちろん、教員側がフィールドでの調査テーマを指定することも想定され、その場合には事前指導が重要になるとと思われる。

IV フィールドワークによるデータ収集方法論の確立に向けて

以上に示した、筆者によるフィールドワークの経験および大学院生によるフィールドワーク実践の観察を通じて、フィールドワークによるデータ収集の方法論について検討したい。ここでは、地理学のフィールドワークの際に重要である地域スケールとの関係、フィールドワーク経験の積層、

フィールドワーク技術に関する形式知と暗黙知という3つ視点から整理する。

Ⅳ-1 地域のスケールの考慮

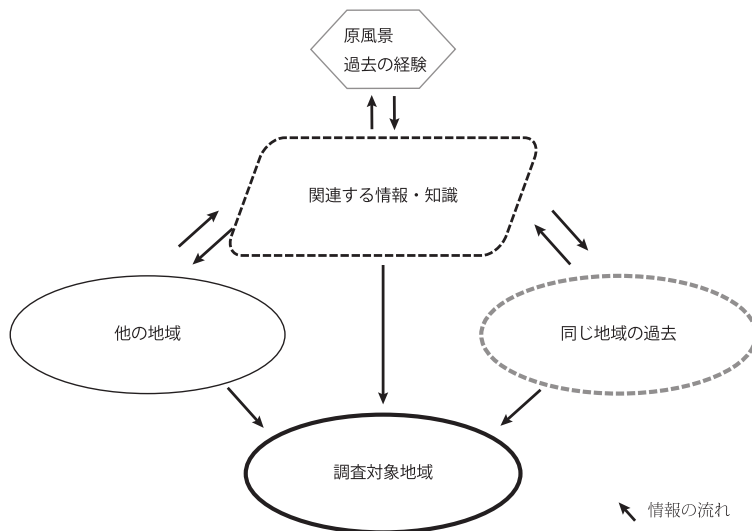
フィールドワークの対象となる事象や地域について、その地域スケールの認識は重要である。事象に関しては、ある特定の事象がより大なる地域の中でどこに存在するのかといった視点に基づいて、調査対象地域に展開する事象の性格を把握できる。これは、系統地理学的な観点ともいえるであろう。一方、地域的な視点に基づいて、調査対象地域はより大なる地域の中でどのように位置づけられるのかといった点も重要である。これは地誌学的な観点であり、全体地域の中での部分地域という考え方に基づいている。同様に、調査対象地域内にさまざまな形で存在する要素の内部構造に基づいて、その地域がどのような地域であるのかを検討する観点と、調査対象地域と異なる地域との間に相互に存在する階層構造などの関係を検討する観点がある。こうした地域のスケールを考慮することによって、フィールドワークによって収集するデータの位置づけを明確にすることができるとともに、調査を実施する地域の性格をより

正確に把握することができるのである。

Ⅳ-2 経験の積層

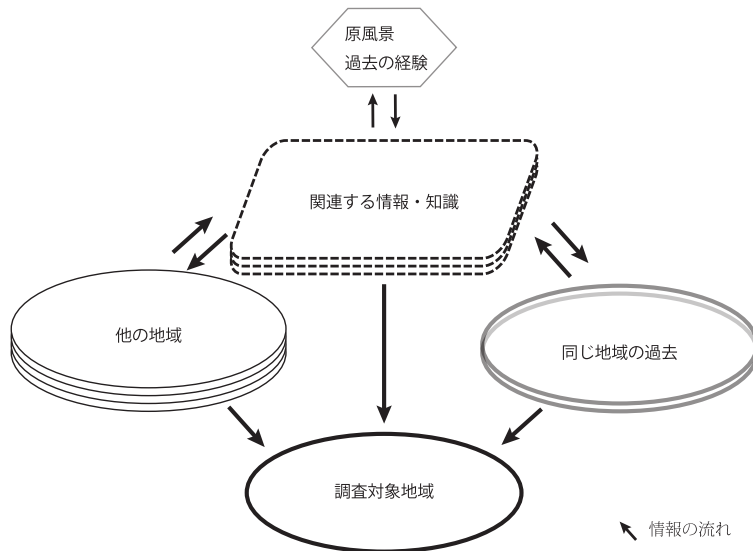
筆者と大学院生とのフィールドワークを比較すると、フィールドワークの経験の差がその違いに大きく反映されていることがわかる。フィールドワークにおける経験の差に関して、整理を試みると、その背後に存在する要素は大きく次の3点に見いだせるであろう。すなわち、「他の地域」、「同じ地域の過去」および「関連する情報・知識」である。また、個人差はあると考えられるが、「原風景・過去の経験」が「関連する情報・知識」に大きく影響を与える。第1図と第2図は、ビギナーとベテランが、それぞれ同じ地域を対象としてフィールドワークを実践する際の関係構造を示している。こうした関係構造の中で、調査対象地域の性格や特徴について、「他の地域」や「同じ地域の過去」と比較しつつ、それらの間に存在する類似性や異質性を整理していると考えられる。

ビギナーの場合、地理学や関連学問分野についてある程度の情報や知識を有する。その結果、「関連する情報・知識」は自身の知的学習によって徐々に厚みを増していく。同時に、「他の地域」にお



第1図 ビギナーによるフィールドワーク実践の関係構造

(筆者原図)



第2図 ベテランによるフィールドワーク実践の関係構造

(筆者原図)

けるフィールドワークの経験によっても増強されていく。こうした経験の下で、対象地域に滞在し、フィールドワークを実施することになる。その結果、乏しい関係構造の枠組みでフィールドワークの実践を迫られることになり、多くの時間を要したり、つまづいたりすることが多々生ずると考えられる。

一方、ベテランの場合には、一般に「関連する情報・知識」において既に多くの蓄積がある。また複数の「他の地域」におけるフィールドワークの経験、場合によっては調査対象地域についての「同じ地域の過去」の経験によって、さまざまな経験が積層構造をなしている。「関連する情報・知識」と経験の積層とは、お互いに情報を交換しながらそれぞれの要素を増大させていく。こうした関係構造の中で、ベテランはフィールドワークを実施しているのである。その結果、良好な関係構造の枠組みのなかで、「他の地域」や「同じ地域の過去」と比較しつつ、それらの間に存在する類似性や異質性を整理し、対象地域で何をどのように調査すればいいのか、どうすれば論文としてまとめることができるのかを判断できるのであろう。そのため、必要なデータの選択がフィールド

滞在の事前に、もしくは滞在中に素早くなされ、短時間でのフィールドワークが可能となると考えられる。

ビギナーとベテランにみられるこうした関係構造の中で、それぞれが同時にフィールドワークを実施するとどのような結果が出るのかは自明であろう。一般には、大学院生レベルであれば、修士論文に関するフィールドワークに、さらには同時並行になされる授業としての調査実習に多くの時間を費やし、その過程の中で「他の地域」や「同じ地域の過去」の経験が結果的に増えていく。また、同時に「関連する情報・知識」も蓄積されていくのである。

しかし、この関係構造において、ビギナーによるフィールドワークが、ベテランによるそれに常に劣るとは限らない。もちろん、「他の地域」の経験、「同じ地域の過去」の経験については、物理的にベテランに比べて少なくなるのは当然であろう。しかし、「関連する情報・知識」の部分で、斬新なアイデアが創出された場合、または「原風景・過去の経験」が活かされる場合には、フィールドワークを通じて優良なデータが収集できる場合も考えられる。

Ⅳ-3 フィールドワーク技術に関する形式知と暗黙知

ほとんどの大学や大学院では、実験や実習という名称でフィールドワークの方法論についての授業がある。しかし、そこで教授されるのは、地図や資料の概要やその取得方法といった「形式知」が中心である。これらについては、さまざまな教科書があり（たとえば上野・久田編, 2011; 浮田編, 1993など）、その有用性に異論はないであろう。また、多くの人びとは、こうした授業を受講して地理学者になっていく。

一方で、データの収集方法、たとえば、何に注目すればその事象に関して有効なデータを得られるのかといった点は、「暗黙知」となってきた。それは、地理学者ごとに異なるものであり、場合によっては秘密とされたこともあると考えられる。一方で、「暗黙知」を「形式知」に変換していく試みも、もちろんなされており、上記の教科書がそれに該当する。また市川（1985）では、調査対象とする地域の観点をはじめ、聞き取り調査をどのようにすべきかといった点についても追求されており、同書は暗黙知の形式知化を試みた貴重な成果であろう。また、石井（1988）は地理写真の有効性を論じるとともに、その技術論を展開した。人間の目に見える景観をどのように撮影するのかという点は多くが形式知化されている。一方で、調査対象地域において何が重要な要素なのかといった点は、依然として暗黙知のまま存在する部分が多いと考えられる。

最後に、暗黙知の中で形式知になるものとならないものを整理すると、調査のテクニックの多くは形式知と捉えられ、これについては市川（1985）をはじめ多くの教科書で示されてきた。また、第1図と第2図に示した「関連する情報・知識」も基本的には形式知であり、多くの地理学関係の研究書や地誌書、既存の論文によってそれらの蓄積

が可能である。さらに、「同じ地域の過去」や「他の地域」についても、上記の資料によって形式知としてある程度は蓄積される。しかし、「同じ地域の過去」や「他の地域」については、研究者が自分自身の経験を通じて、地域のスケールとともに整理を繰り返して積層していくイメージが存在する。この部分が、形式知に変換することのできない暗黙知として性格付けられるものであると考えられる。これに基づいて、対象地域の性格を把握するためにフィールドワークを実践されていく。

Ⅴ おわりに

本研究では筆者と大学院生それぞれのフィールドワークの実践を題材にして、それらの特徴を比較した。フィールドワークが実施される対象地域をめぐる関係構造においては、「原風景・過去の経験」、「他の地域」、「同じ地域の過去」および「関連する情報・知識」といった要素が、調査対象地域に関する情報に影響をもたらす。しかし、個人差はあるものの、この関係構造は経験によって異なる。つまり、ベテランは一般に「関連する情報・知識」や「他の地域」に関する多くの蓄積があり、さらには調査対象地域についての「同じ地域の過去」の経験に基づいて、さまざまな情報が積層構造をなしているなかでフィールドワークを実施している。一方、ビギナーは少ない情報の積層構造のなかでフィールドワークをせざるをえない状態にある。一般にフィールドワークの技術はブラックボックスと見られてきたが、その一部は形式知というかたちで教科書などに掲載されている。それに対して依然として暗黙知であり続けるのは、対象地域の特性を、研究者が自分自身の経験を通じて、さまざまな地域のスケールのなかで位置づけることであると考えられる。

本研究を遂行するにあたって、平成22～25年度科学研究費補助金（基盤研究（A））「フィールドワーク方法論の体系化－データの取得・管理・分析・流通に関する研究－」（研究代表者 村山祐司）の一部を用いた。

【文 献】

- 石井 實 (1988) : 『地理写真』 古今書院.
- 市川健夫 (1985) : 『フィールドワーク入門－地域調査のすすめ』 古今書院.
- 上野健一・久田健一郎編 (2011) : 『地球学調査・解析の基礎』 古今書院.
- 浮田典良編 (1993) : 『ジオグラフィックパル 地理学便利帖 1994-95年版』 海青社.
- 呉羽正昭 (2012) : 東ヨーロッパにおけるルールル・ツーリズムの展開. 小林浩二・大関泰宏編 : 『拡大 EU とニューリージョン』 原書房, 198-208.
- 呉羽正昭・伊藤貴啓 (2010) : ルーマニアにおける農村ツーリズム. 農業と経済, **76**(9), 131-137.
- KUREHA, M. (1995) : *Wintersportgebiete in Österreich und Japan*. Selbstverlag des Instituts für Geographie der Universität Innsbruck.

英文タイトル

Examining Data Gathering Method in Field Work of Human Geography:
An Attempt to Relate Elements on Field Work in Micro Scale Region

KUREHA Masaaki